

栄光の関東大会出場!

第30期 島田 信

我々30期が入部した当初、ラグビー部は2年、3年生の諸先輩方の総勢が合わせて15人に満たないクラブだった。頭数が足りないからと、練習をはじめて2〜3週間足らずのうちに、もう試合の場に立たされた。ようやくルールを飲み込んだばかりの素人としては、ついていくのに必死である。汗まみれになりながら練習に明け暮れる日々が続いた。

その僕等が2年に進級したときに巡ってきたのが、関東大会出場という栄誉である。なみいる強豪校の中を勝ち上がって出場権を得たのは、都立では国立高校とわが千歳高校の2校のみ。しかも、キャプテンの小野先輩を中心とした5人の3年生を除き、残りのポジションのすべてを占めていたのは我々2年生である。大会の出場通知を手にしてからというもの、ただでさえ厳しかった練習にさらに拍車かけられた。授業の合間の昼休みにはランパス等の練習。放課後は、たびたび足を運んでくださった27期の桑原先輩の指導による猛特訓が行われた。6時間目が終わり、教室の窓から桑原先輩の白い車が見えると、ありがたい反面、これから待ち受けている過酷な試練を思ってゾットしたものだ。また、ときには、23期の高木先輩の口利きで使用が許された八幡山の明大グラウンドに赴き、よく整備された柔らかな土の上で、生タックルの練習を繰り返すこともあった。

先輩たちの助力を得て、大会に向けて準備は着々と進められた。ところが、ここでひとつ、大きな問題が持ち上がった。なんと、関東大会の当日が、高校の一学期の中間試験とかち合ってしまったのである。試合をとるか、テストをとるか、職員の間で議論が紛糾し、かなりもめた

らしい。当時、クラブ顧問をされていた大場先生の頑張りもあってか、結局、試験を欠席するラグビー部員たちの全員に一律各科目の平均点を与えるという条件で、試合の出場が認められた。成績優秀な部員は泣き、勉強が苦手な部員には朗報である。ちなみに、我々30期の連中のほとんどが諸手を上げて大喜びしたのは言うまでもない。

大会当日、僕たちは千歳ラグビー創立時の伝統を継ぐ黒のユニホーム姿、額には女子マネージャーが手作りしてくれた白のはちまき、といういでたちで試合にのぞんだ。相手は、会場となっている千葉の地元校。前日の雨でぬかるんだ地面に足を滑らせながらも、我が校のフォワードはグイグイ押した。ボックスのシザーズ攻撃もおもしろいほどよくきまった。千歳高校のトライを宣言するアナウンスが幾度も会場に響き渡る…。圧勝だった。

僕たち30期にとって、千歳ラグビー部の先輩及び後輩たちに胸を張り、一番誇れる思い出が、この関東大会の出場である。同時に、多くの同期と肩を並べてプレーができた2年生の一年間が、高校生活の中でもっとも楽しく、すべてを忘れて夢中でラグビーに打ち込めた一年間であった。

1年のときからレギュラーで、入部2週間目の試合で見事なトライをきめた菅沼(キャプテン:NO.8)、俊足で強い当たりのまじめな少年中島(バイスカプテン:ウイング)、優しい顔できつい練習にも耐えるクールな飯倉(スクラムハーフ)、素早くコスいプレーの石坂(フランカー)、おっとり冷静な江川(プロップ)、一見頼りなさそうに見えるが確実なプレーをする大林(フルバック)、細い身体に秘

めた闘志は誰にも負けない小川(フランカー)、首の強さはチーム一のタフガイ奥平(プロップ)、普段は静かだが試合となると敵味方を問わず怒鳴りまくる小倉(スクラムハーフ)、負けん気の強さで相手を圧倒する金森(ロック)、強靱な体力だけが取り柄の島田(フランカー)、逃げ足の速さとハンドオフで相手をおかす萩原(ウイング)、みんなを励ましながらプレーをする大林(フルバック)、超高校級の巨漢でありながらすばしっこい椋本(プロップ)、そして、同期ながら姉のような温かみのあるマネージャーの立川さん……。残念ながら全員の名前はOB名簿には載っていない。しかし、この15名のひとりひとりが、ラグビーを通じて苦楽をともにし、青春を分かち合った30期の忘れがたい仲間たちである。

（ 第 30 期 同期生からのことば ）

30期小川といっても私を思い出してくれる人は、まず少数だと思います。なぜなら私は途中退部者であり、当時のメンバーから見れば落ちこぼれなのです。

4月、入学とともに先輩の甘い誘いにのり、まったく軽い気持ちで入部してしまった私のその後は悲惨なものでした。何をやっても人に優れる点はなく、他のメンバーが何なくこなしてしまうランニングひとつとっても私には死の苦しみでした。「トラック10周。ピリ5人はボーナス3周!」私はこのボーナスからのがれるためにのみ全力で走るのです。10周目のゴールですら気が遠くなりながら入るのです。が、その5人に入ってしまう。しかし、寝っころがっているわけにはいかず、どうにか動き出しボーナスをいただく毎日でした。

夏合宿は千葉の検見川で行われ現役と〇するOBが集まり、御指導いただいたように思えます。「もうだめだ。」と思うころ「休憩!」の声がかかる。100m位先に水道の蛇口が一つある。その蛇口を目掛けて一斉に走る。それまで何をやってもどりだった私なのだが、この時ばか

りはどこから力が湧くのが優秀な順位でその蛇口にありつくのでした。

こんなことの続く中、「やめようか」「いつやめよう」と考える日々を送りました。不思議なことに、辛くイヤな練習が終わって校門外の十字屋でジュースを飲んでいるときのみ「よし、まだ続けるぞ!」という気持ちが生えるのです。しかし、翌日の朝日とともに「いつやめよう」の考えが頭をいっぱいにしてしまうのです。「やめたら後悔するんじゃないか」

「いや、続けるのは無理だ」。この長い長い葛藤の中、私はついに退部を決意し実行したのです。(ひとつだけ言い訳を付け加えさせていただくなら、当時私は体に故障があり、医者通いをくり返さねばならなかった事情もありました。)

その後、ラグビーをやめた後悔は常に付きまとうものの、私は一つのことには気付いたのです。「自分の考えている自分の限界と本当の限界には大きな差があるのだ。」でなければ、あのボーナスのランニング、休憩の水争いができるわけがない。この考えほどその後の私の生活に大きく影響したものはありません。あの時から25年近くが過ぎました。今日まで、私なりに多くの困難、転機がありましたが、ことごとくそれらに向かう心の中にあのラグビーで得た「体験・考え」が存在し、私を良い方向へ導いてくれたと信じています。

「チームを勝利に導く」という点で私のプレーヤーとしての生活は、まったくお話しにならないものであり、従ってははじめに述べたように私を思い出せる人は、まず少数でありましょう。しかし千歳ラグビーの体験を生活に生かし続けているという観点では、なかなかのプレーヤーである、と胸を張って誇ると同時に千歳ラグビーに心から感謝し愛着を持っております。

現在私は、中学校の教員としてかつての落ちこぼれラグビーの年齢に近い子供たちと毎日を送っています。様々な問題にうまく対処できる子もいれば、問題に押しつぶされてしまいそうな子もいます。そんな時、私は子の話をよくするのです。「うまく解決できるのに越したことはないが、うまくいかなくてもそこで悩み耐えることにより自分では思いも寄らないような力が自分にあることに気付くものだ。それを得るために苦労する点こそ本来の価値があるのだ。」

今でも時折、真夏のグラウンドに立つことがあります。そんな時、まず頭に湧くものは夏合宿前の炎天下の練習のニオイ、そしてそんな夜、カッコよくステップを切ってトライを決める夢を見ます。退部してしまった部員であっても、40才近くの年齢になっても、あの千歳ラグビーの一時期が忘れられない。こんな子供もいるのです。

小川政明